

「尾崎三良自叙略傳」を読む

土屋 博

「尾崎三良(さぶらう)自叙略傳」(中公文庫、昭和五十五年刊)を神保町の古書肆の一つ小宮山書店にて購入す。絶版なれど隠れたる名著にて、上・中・下、三卷揃ひの価格は九百圓なりき。インターネットの「日本の古本屋」の相場は四千圓前後なれば、蓋し良き買物とこそ言ふべけれ。

尾崎三良は天保十三年(一八四二年)の生まれにて、大正七年(一九一八年)に歿せり。

この自叙略傳に記されたる波瀾萬丈の生涯は、登場人物も多彩にて、息吐く間もなく一氣に讀了したり。

三良、幼き頃に父親を亡くし、辛酸を嘗む。三條實美の家人の養子となりて信任を得、以後出世を重ぬ。長崎に學びたるのち、三條實美の嗣子と共に英國に留學する機會を得。歸國後は、太政官、露西亞駐在一等書記官、太政官大書記官、内務大丞、元老院議員、貴族院議員、第一次松方内閣の法制局長官を歴任す。男爵を受くる榮譽にも浴す。

自叙略傳を著したる所以は、フランクリン自傳に觸發せられ、自らの子孫に向け執筆したる由。(冒頭部分のみ口述筆記部分あれど、以後の大部分は直筆の墨書残りどぞ。)

文語體は力強く、強記に基く克明なる記録は臨場感に富み、歴史資料としては第一級のものとするべし。膨大なるにも拘らず「略傳」とあるは、英國時代に英國人教師の娘と正式に結婚し、二人の娘まで儲けたるも、いざ日本に歸國の段に、離婚の已む無きに至りたる事實をば一切伏せたるが爲なり。娘の一人、テオドラ英子、のちに來日し、罌堂尾崎行雄(偶々三良と同姓なれど血縁關係は無し。)に嫁せり。テオドラと行雄の間の娘は、我が國同時通譯界の草分け、相馬雪香なり。

本書より印象に残る箇所を列擧せば、以下の通り。

- 一、長崎にて親交を深めたる坂本龍馬に對し、慶應二年十月十四日京都醬油屋にて大政奉還後の職制案(門地に關係せざる「參議」ポストの創設を柱とす。)を示し、坂本も賛成し全面協力を誓ひたること。
- 二、慶應三年十月下旬西郷隆盛より船中にて祕かに西郷の將來の運動方針及び目的(巻紙二尺)なる歴史的書面を直接手交せられたること。
- 三、英國留學中、岩倉使節團の米國にて條約改正交渉を始めたりの報に接し、かくの如き愚擧をせば歐州も最惠國待遇を求むること必定なれば、我が國にとりて不利とならむことを注進せんがため、明治五年八月急遽華盛頓に飛び、木戸・岩倉を説得し、奏功したること。
- 四、露西亞駐在當時の兼任國瑞典訪問記には、明治十三年十月當時の瑞典國王との遣り取りなど活寫あること。(小生も駐在したる土地柄なれば、懐かしき一入なり。)
- 五、明治十八年十二月伊藤博文の初代總理大臣就任の動きに際しては、十八年間も太政大臣を務めたる三條實美公を冗官の内大臣とする結果となる故、三條公の内大臣就任甘諾を極力阻止せんとしたること。

文語的表現、歴史的假名遣ひ満載の小さな活字の文庫本三冊は、文語テキストとしても價値あらむと思料す。

